



## 学術書編集と学問・著者・読者 中田英樹・高村竜 平編 『復興に抗する』をめぐって

|          |   |
|----------|---|
| 著者       | 永滝 稔  |
| 雑誌名      | PRIME = プライム  |
| 巻        | 42  |
| ページ      | 94-102  |
| 発行年      | 2019-03-31  |
| その他のタイトル | Fields of Study, Authors, Readers and the Editing of Scholarly Texts: About Hideki Nakata and Ryouhei Takamura ed. Fukko ni Kousuru |
| URL      | <a href="http://hdl.handle.net/10723/00003654">http://hdl.handle.net/10723/00003654</a>   |

## 学術書編集と学問・著者・読者

—中田英樹・高村竜平編『復興に抗する』をめぐって

永 滝 稔

(有限会社 有志舎 代表取締役)

### はじめに

2018年1月末に『復興に抗する—地域開発の経験と東日本大震災後の日本—』（中田英樹・高村竜平編、本体価格2600円）という本を出版させていただいた。爆発的に売れるということはないが、有り難い事にコンスタントに売れ続けている。学術書出版社にとっては、こういう堅実な売れ方をする本が一番の「孝行者」である。

以下、拙文では、本書がどのようにして編集され、世に放たれ、議論されたのか、を紹介しつつ、そこから歴史学系学術書編集・出版というものの現在とこれからを考えてみたい。

私は有志舎という出版社をやっている。「やっている」というのは社長であるということだが、正社員はいない（経理担当役員である私の老父は病気のため休職中）。私とアルバイト2名だけで、編集・販売といった基幹業務は私一人が行う「一人出版社」だ<sup>(1)</sup>。

ちなみに2000年代以降、こういった「一人出版社」は増えている。出版不況の継続・深化により、特に中堅クラスの出版社の経営が苦しくなり、出版点数の厳しいノルマなどが編集部に課されるなかで、それに嫌気がさした編集者が辞めて一人で起業するというケースも目立つ。一見、自由で

楽しそうに見える「一人出版社」だが、会社＝社長本人なので、会社の運転資金が苦しくなれば、個人の貯金を注ぎ込まないといけないし、個人の貯金はもはや個人のものではなく、いつでも会社のものとなるよう運命付けられる。また、コンスタントに新刊を出していかないと資金繰りが厳しくなるから、結局、会社員時代よりも忙しくなる。それでも、自分の出したいジャンルに絞って出版をできるので、その自由を何よりも優先するならば、「一人出版社」になる決断もありえよう。私も、安定した収入環境を捨てて、自由な出版機会を選択したクチである。

さて、そういう有志舎において『復興に抗する』という学術書を出版したわけであるが、その話の前に学術書出版をめぐる現状を述べておきたい。

### 1 学術書出版の現在

基本的に、多くの学術出版社では自社で出版する学術書（ここでは商業出版物たる書籍に限る）を大きく二つに分けていると思う。一つは専門研究者を主な読者と考える「専門書（専門研究書）」であり、もう一つは専門研究者だけではなく広く一般社会の読者にも読んでもらえることを目指す「学術教養書」である。

しかし、実際に本を売る現場の書店ではそうい

う分類は意識しているのだろうか。何人かの大型書店・歴史書担当の書店員にきいてみたことがあるが、すべて、「有志舎さんの出す本は、基本的に全部専門書という認識です」ということだった。つまり、著者・版元の自意識と書店員（そして読者）の間にはズレがあるということであり、そもそもそのような分類には意味がないのかもしれない。結局のところ、書店員や一般読者にとって一つの括りしかないのなら、学問を広めるためには教養書であっても専門書であっても、どうすれば一般読者に読んでもらえるのかを考えないといけないという事になる。

ところで、現状において学術書はどれくらい売れているのだろうか。出版業界全体については分からないので、有志舎の場合をお示ししたいと思う。

基本的に、本体価格5,000円前後の専門書（と有志舎が一方向的に分類している）の初版部数は450～700部の間で、本体価格2,500円前後の学術教養書（同じく有志舎分類による）は1,000～1,200部の間というのがスタンダードなケースである。そして、刊行後1年でいずれも80～85%売れば、ほぼ損にはならないと言える。が、実際にこの合格点をクリアできた書籍は少ない（ちなみに、刊行後5ヶ月で70%を売り上げている『復興に抗する』は、現状の売上状況からすれば当然、クリアするであろう）。

2005年の創業から2018年7月現在までで、そういう本は総刊行点数122点中で26点（約21%）しかなく、残りの96点（約79%）は不合格である。では、どうして有志舎は経営を続けていられるのか？ それは、不合格ラインの本を中心に多くの書籍で、あらかじめ100万円以上の助成金交付や同額近い著者自身による買上を約束・実行してもらって赤字を埋めているのと、一部のたくさん売れた本の利益で、売れなかった本のマイナスをカバーしているからである。

しかも、2005年～2011年までの6年間だと総点数49点中で合格点の本は14点（29%）あったのに対し、2012年～2018年7月の直近約6.5年間では73点中12点（16%）しかない。つまり、かつてはそれでもまだ売れていた歴史学術書は、ここ6年間ではとてつもなく売れなくなっているのである。そして、それをカバーすべく出版点数だけは増えてしまい、自転車操業になっている。しかし、これは有志舎特有の現象ではなく、学術書出版社の多くが直面している事態であろう。

さらに特徴的なのは、専門書はまだ堅実に売れているものが多いが、学術教養書の方が売るのは難しいという事だ。上記の合格点をとった本のうち、専門書は17点、学術教養書は9点である。学術教養書は専門書の約半額の定価なので、「安いのに売れない」という事になる。というより、学術書は安いからといって売れるものではない、とも言えるのであり、ここにも、専門書と教養書を分離する意味が見出せなくなっている。しかし、だからといって、高定価の本だけになってしまうと、さすがに買いたい人も買えなくなるから、確実に歴史学を学ぼうとする人々の裾野は狭くなっていってしまうだろう。

そういうなかで、本に出会うことのできる書店という場所そのものが急激に減少しており、2017年8月24日付『朝日新聞』では、「書店ゼロの街2割超」という見出しが掲げられた。つまり、全国の2割強に当たる420の自治体・行政区が、書店が一つもない「書店ゼロ自治体」になっているのだ。散歩のついでや通勤・通学の帰りに、書店にフラリと入って目にとまった本を買うという今まで当たり前だったことが、もはや当たり前でなくなりつつある。購入機会自体が減っていけば、当然、売上は下がっていく。

「とはいえ、さすがに図書館は学術書を買ってくれているだろう」と思っている研究者もまだ多い。しかし、そういう時代も終わっている。

ご存じのように、自治体や大学への指定管理者制度の導入により、もはや公立図書館の多くは民間委託に変わった。それだけの結果ではないものの、本の貸出回数と来館者数を図書館の評価に連動させる事が増えて、どの本をその図書館が購入するかという選書作業も当然、以前とは変わってきている。基本的には、貸し出し数の多さが見込まれる本や利用者からのリクエストが多い本はたくさん購入され、それがない本はなかなか購入されないという傾向がある。したがって、専門的で読む人が限られている学術書は購入リストからは外されるケースが多くなる。もちろん、大学図書館は依然として学術書をかなり買ってくれるが、公共図書館はもはや「優良顧客」ではなくなったと言ってよい。ちなみに、有志舎は多くの公共図書館の指定管理者にもなっているT社と直接取引をしているが、5000円前後の専門研究書であれば20部程度、2500円前後の学術教養書でも40部程度の注文しかないことが殆どである。もちろん、公共図書館はこの会社からだけ買っているわけではない。しかし、他のルートを入れたとしても、全国で数十館でしか有志舎の本と出会うことはできないのである。ちなみに、もっと図書館に営業を掛ければよいではないか、と思うむきもあるだろう。しかし、実際には購入ルーティーンが決まっている図書館が殆どなので、新たにDMを送ったり営業を掛けても、殆どの図書館では効果がない。一方で、『朝日新聞』などの新聞書評に載った場合には、図書館から次々と注文が届く。逆に言えば、新聞書評に載らないと図書館では「購入すべき本」だと認識されないのではないかということだ。つまり、「学術書は、出せば自動的に図書館に入る」という時代は終わったのである。

さらに困った事に、研究者自身や学術書編集者もまた学術書を買わなくなっているのではないかと思われるのである。数々の学会販売における出版各社の売上激減が何よりもそれを物語

る。今はピンポイントで自身の研究テーマや興味と関係しない限り購入することは稀れになってしまったようだ。また、学会販売においても公費(校費)での購入が激増し、研究者が自費で購入するというケースが減っている。その一方で、「大学の図書館が買ってくれないので、自分が公費で買って図書館に入れないといけないのですよ」という嘆きも大学教員からよく聞く。

つまり、依然として「本を書きたい・出版したい」という研究者は多くいるものの、その成果である学術書を買ってくれる読者や機関が激減しているのが現状である。

したがって、このような四面楚歌状況である以上、学術書の著作者である研究者自身と編集者は、10年・20年前のように、ただ自分の書きたいことを書いていればよい、質の良い研究内容であればよい、そして、それをそのまま編集して本にしていればよい、というわけにはいけなくなった。むしろ、研究成果の善し悪しだけでなく、その本の内容がどういう現代的意義をもつのか、それがこれまでの学問認識をどう覆すのか、を明確に示しているか(これまでの本といかに差別化できているか)、また、それらをどう叙述すれば・どう表現すれば・どう編集すれば広く読まれるのだろうか、ということに常に考えないといけなくなったのである。そういう意味では、学術書もノンフィクションや文芸書と同じ土俵に立たされるようになったということである。学問的な水準の高さももちろんあってのことだが、さらに内容のインパクトと論述の明解さ、構成・叙述の面白さが、その本の価値を決め、売れる・売れないを左右するようになったということだ。

## 2 『復興に抗する』の場合

さて、そういうなかで『復興に抗する』のケースについて、である。

この本の企画のスタートは2015年11月13日であった<sup>(2)</sup>。

その日、私は中田英樹氏（農業経済学専攻）に依頼してある単著について相談するため、彼の自宅がある埼玉県北浦和に向かった。そこでひと通り単著に関する打ち合わせを終え、近くの中華料理店で二人だけの懇親会となった。少し経って、そこそこ盛り上がりつつあるところで、中田氏から「今やっている共同研究」というものの話をうかがった。それによると、東日本大震災後の復興について、何人かのメンバーで現地調査を踏まえた研究を行っており、報告書的な論文は大体書けているのだが、出版まで至るかどうかわからない状況ということだった。

そこで、とりあえず「序章的な文章」というものがあるというので、その場で見せてもらった。それがのちに『復興に抗する』序章の一部となるものであったが、少し前に評判となったNHKのドラマ「あまちゃん」を使った東北論・地方論のような文章であり、そこにはもう「東日本大震災からの復興なるものを根本から考え直す」という姿勢とそのための歴史的な視点が存在していた。これを読んだとき、瞬間的にこれは面白いと思った。編集者は、ある程度経験を積んでくると「勘」のようなものが働くようになり（ただ、実際にはそれは全くの「あてずっぽう」ではなく、無意識に過去のデータを引っ張り出して比較・判断しているのだと思う）、これは商品になるか・ならないかは少ない情報からでも判断できるようになるものである。そのとき、私の勘は、「これはいけるかもしれない」という鐘を打ち鳴らしたのだと思う。そう思えたのは、次の3つの点からだ。

①復興＝良い事、という思考停止状態に異議申立てをすることで、それまでの「頑張ろう東北！頑張ろう日本！」という何とも気持ちの悪い、強制同調主義の御為ごかしのようなスローガンが溢れる日本社会に別の思考・志向をもたらすことが

出来るのではないか。

②しかし、単に現在の現象面だけで論じてしまったら薄っぺらい現状批判本になってしまいかねないが、歴史書出版の有志舎で出す以上、きちんと戦後史・現代史を踏まえて書いてもらえれば、きちんとした歴史書になりうる。また、それを書ける能力がある執筆者なのではないか。

③「あまちゃん」を使って論じるような姿勢からすると、ガチガチのアカデミズム作法に則った叙述ではなく、もっと一般読者にも読んでもらえるような叙述の工夫ができる能力と意欲のある執筆者たちなのではないか。

ただ、この序章の一部だけではきちんと判断出来ないのでは、全体の構造（目次）と執筆者たちが考えるこの本全体および各章のコンセプト、それに報告書用にすでにまとめたという原稿（草稿）を送って欲しい、とお願いした。

数日してそれが届き、早速、私は草稿と目次・企画コンセプトを一週間ほどで読み、中田氏あてに「コメント」として文章を送った。少し長い、以下に全文を引用させていただく。

「はじめに」は大変素晴らしい文章であり問題意識が鮮明に出ていてとても良い。ぜひこの内容で進めるべきと考える。

しかし、この「はじめに」で書かれている問題意識が具体的に各章（各論文）に深く刻み込まれているのかどうかという事が、今の段階ではあまりよく分からない。簡単にいえば、現状ではまだ「論文の寄せ集め」であって、「書籍」になっていない。「書籍」になるためには個々は「論文」ではなく「章」になっていなければならないが、そうっていない。個別が実は個別ではなく、それぞれが固有性を持ちながら全体構造としてつながっていると読者に感じさせられる（執筆者の自意識ではなく）ことが大事なのであって、現状は私

にはそうっていないと感じられた。それに関連しての大きな問題は、この本の読者として一体誰を想定したのか、ということ。現状では、これらを読んで面白いと思う人は専門家（社会学者・農学者・地域研究専門家など）だけであろう。もちろん、それはそれで意味あることなので、そういう事で割り切って本にするということであればそれでも本には出来る。ただし、その場合は初版400部・定価6000円・出版助成金100万円の交付が条件になるであろう。それで良いのであれば、このままお引受けできる。

ただ、私は出来ればこの本を普通のオジサン・オバサンに読んでもらえるものにしたいと思っている。そのためには、個々の文章が個別の「論文」ではなく「章」になり、読者に「自分が興味ある地域について書かれた箇所だけ読めればよい」と考えさせるのではなく、全体を読みたいと思わせないといけない。具体的にいえば、窪川のオバサンが陸前高田について書かれた章を食い入るように読んでくれないといけないのである。そのためには、陸前高田で起きていることを全国の人が「これは自分に関係することだ」と思ってくれるような内容になっていないといけないという事。そこには当然、東京の人も含まれる。本来ならば「東京論」が一章設けられてあった方が良いのだが<sup>(3)</sup>、いまからそれを望むことはできないので、各章が東京論を暗黙の内にも含み込んでいると読者に感じさせられないと、この「構造化」は達成出来ないのではないかと思う。

我ながら、これだけでもたいへんな要望をしたと思うが、加えて私は、「きちんと当該地域における開発の歴史（少なくとも戦後の歴史）を踏まえた叙述を入れていただくこと」もお願いした。

そうしないと、現在の問題がどこから発生したのかが分からないからである。

編者となった中田氏・高村氏がこれに合意してくれて、ここから実に困難な改稿作業が始まった。編者がどのような要望を各執筆者に行ったのかは、私は知るよしもないが、相当過酷なお願いをしたに違いない。いや、そもそも編者間でも意見が異なって激論になったこともしばしばで、それまでの数十年にわたる友情が粉々に壊れるかというような状態にまでなったと聞く。しかし、そういった困難のなかでも執筆・改稿は進められ、東京・神田での編集会議を経て草稿が提出され、それにまた私がコメントをして再度の改稿を行ってもらい、加えてインタビューを掲載するという当初の計画が変更になるなどして、ようやく最終原稿が私の手元に届いたのは2017年7月の事だった。

しかし、さらに初校が出たあとも編者から執筆者への要望は続いたと聞く。実に執筆者泣かせの本である。しかし、そのお陰で本書全体が一定のトーンで叙述でき、「論文集」ではなく、ひとつの「書籍」にすることができたのである。ここまで編者が執筆者の各論考（章）に介入する例は少ないと思うが、逆にそこまでしなければまともな「書籍」にはならないという事を証明した画期的な例になったと思う。

### 3 刊行後

さて、そうして本書が刊行されたのは2018年1月29日であった（奥付の発行日は2月10日）。そして、3月からは福島県猪苗代町の「はじまりの美術館」を皮切りに、東京・関西など数ヶ所でこの本に関するシンポジウム・トークイベントなどを積極的に行った。「行った」と書いたが、これら多くのイベントを推進していただいたのは編者・執筆者の皆さん自身であって出版社ではない。それもまたこれまでの本と違うところだった

かもしれない。執筆者一人一人が出来るだけ多くの人にこの本を知ってもらえるようにたくさんのイベントを仕掛けていった。そのお陰で、イベントをやるたびに本の注文が届くようになり、今もコンスタントに売れている。現代においては、学術書も書きっぱなし・出版しっぱなしではダメなのだ。そのあとに著者・執筆者がオモテに出て行って読者と直接対話することが、大きな販売促進効果を生む。もうそれが特別なことではなく、当たり前になってきている。

ジュンク堂書店はじめ多くの大型書店はもちろん、世田谷のB&Bや杉並のtitleといった個性的な地域書店はもはや単に書籍が販売されるだけの場所ではなく、トークイベント・読書会など、本に関わる催し物を行うイベント空間でもあり、そこでのイベント効果は絶大なものになってきている。そして、こういったイベントの実施は単なる書籍の販促効果だけではなく、学問の魅力を広げていく、また学問の裾野を拡大していく効果も持っている（もちろん、それにより著者のネームバリューも高まっていく）。ぜひとも研究者の方々は、「書を捨てて街に出る」のではなく、「書を持って街に出て」欲しい。学問の危機が唱えられるなか、大学のなかでだけ学問を語るのではなく、街中で、商店街で、書店やカフェで学問を語って欲しい。そして、そこに本があることで、読書という行為自体もまた広がっていくはずだ<sup>(4)</sup>。

このように、単に執筆しっぱなし、出版しっぱなし、売りっぱなしではなく、本を書く人・つくる人・売る人・読む人が一つの場に集まって語り合い、読書経験や学問を日常世界のなかで共有し合うことが分厚い「市民社会」を創り出す源泉の一つになるのではないだろうか。こういう事は昔から言われてきた事なので、目新しい事ではない。しかし、3・11以降のリアル社会において改めてその価値が浮上してきているのではなかろうか。

反知性主義とWeb空間に氾濫するネット右翼

の妄言に対抗するものは、こういう昔ながらのリアルなFace to Faceの関係（そういうコミュニティの再生）で、時間はかかっても地に足のついた「知」の拠点を学校・大学だけでなく地域の生活空間の中に作っていくことだと私は考える。そして、そういう拠点がまた学術書の読者層をつくり出すだろう。研究者も是非、「街に出て」その学問を直接、市民に伝えて欲しい。

そして、そういう学問のための新たな場とコンテンツを直接、地域の読者に向けてプロデュースするのも、これからの学術書編集者の役目ではなかろうか。編集者もまた、出版社から「書を持って街に出る」のである。

なお、そういったシンポジウムのなかで、本書の叙述方法について疑義が提示されたという。先行研究についてのレビューがないのは、これまでの研究へのリスペクトを欠くものであって、学術書としての資格に欠ける、という大意であったと私は編者から聞いた。

しかし、私はそれを聞いたとき、本当にその人はこの本をきちんと読んだのだろうか、と思った。本書には、専門研究書のような研究史に関してまとまった叙述を設けていない。それはわざと設けず、全体の叙述の中で必要に応じて書いていくという方法をとった。だから、本書の註記はすべて先行研究を含めた文献に関するものであり、研究史に触れる必要がある場合は本文でわざとそれとは気づかれないように書かれている。

それはなぜか。研究史についての叙述は、研究者以外の読者にとっては退屈きわまりないものであって、読むのがつらいものであるということを知りたい。研究者はまず理解して欲しい。彼らは仕事のために本書を読むのではないのだ。本書を手にとって欲しい読者の大半を占める一般読者にとって、どうすれば読みやすいものになるかを考えた結果がこの叙述方法である。

そもそも学術書において、「研究史について」のような叙述部分がまとまってないといけないなどという硬直化した「作法」に従う必要などない。学術書はもっと自由なものである（当然、先行研究へのリスペクトの仕方も自由に表現されるべきである）。それを窮屈にしているのは、アカデミズムの方がもつ慣習であり、「作法」である。

博士論文や学術誌に掲載される論文などは「作法」通りであってよい（どうぞ、ご自由に）。しかし、論文などにおける作法と考え方そのままでは商業出版においては通用しない。論文と商業出版物たる学術書は全く違う性質のものであり、学術書は研究者以外の一般読者にこそ読まれなければならないのである。そうしない限り、学問は一部のアカデミシャンだけに稀覯的に継承されていくだけであり、そういう学問はやがて衰退し、滅亡するだろう。学問を社会に広げていくための表現形態・叙述を研究者こそがそれぞれに新たに案出していかないといけないのだと思う。

しかし、「読みやすい」という事は「簡単に結論を出せている」ということではない。この点から言えば、本書は実に分かりにくい本だろう。「復興に抗する」とはいえ、何か別の復興の道筋や対案を示す本ではないからだ。いやむしろ、そういった対案提出を拒否し、復興という、一見、全く正しいかに見えるものが押し流してしまう、なかなか分かりにくい個別の地域のあり方や複雑で多様な個人の生活・思いを描き出す本になっている。そこから見えてくるのは、地域や個人のなかには常に葛藤があり、たったひとつのクリアなやり方などは存在し得ないということだ。

## おわりに

先程、「この本は何か別の復興の道筋や対案を示す本ではない」と書いた。だが、終章ではあえて現代日本社会へ鋭い切っ先が突きつけられる。

「多文化共生」や「多民族共存」の議論には、優位に立つ「手を差し伸べ、理解する（してあげようとする）側」と、劣位に「手を差し伸べられる弱者たる側」という不均衡な力関係が、ほぼ必ずやある。それゆえに「手を差し伸べる側」こそが、「差し伸べるか」「差し伸べないか」の決定権を握り、「差し伸べられる側」はじっとそれを無言で待つ。あるいは「無力で純粋な」犠牲者としてのみ、「手を差し伸べてください」と助けを請うことができる——そうした非対称性の問題が、まづもって議論の初手からある（325ページ）。しかし、である。

このことは、「彼ら〔福島第一原発で汚染水貯蔵タンク建設を請け負った外国人移民労働者〕が犠牲者ではない」（つまりは高給所得に徹底した「デカセギ」移住民である）と簡単に言って済ますこととは決定的に違う。（中略）彼らが求めているのは、無言の犠牲者としての彼らへの救済ではない。彼らを犠牲者として、日本社会こそが救済されてきたこと——このことを、この記事〔『毎日新聞』〕で彼らこそが現代日本社会に対して詰問しているのであり、このような契機をきっかけにして「多文化主義」をめぐる議論は、いま一度、真っ向から再検証されるべきだと、筆者は思う（326～327ページ、傍点は原文ママ）。

このように、本書は最後に移民労働者と日本社会の問題にまで議論を広げていく。そうなのだ、日本人が外国人に職を与えているのではなく、彼らの労働によって今の日本社会は存立し得ているのだということ。日常のなかでのコンビニや工事現場を思い浮かべれば、どんな人でも分かることだ。

そして、1年半後に迫った2020年の東京オリンピックに浮かれる日本社会を見るとき、何かもっとも大事な根幹がすでに見落とされたままになっ



ているのではないかと感じる。学問と学術書は、それをしつこく冷静に指摘し続けていかないとけない。そして学術書出版社・編集者は、その本を読んだ人々の思考や行動の源泉になるような知的刺激に溢れた学術書を出し続けなければならない。

本が売れないと絶望しているヒマがあったら、何をどうすれば読んでもらえるのかを考え続けなといけないのだ。学術書出版とは著者と出版社・編集者にとっての「永久革命」なのだと思う。

※なお、一部の叙述が「歴史学・学術書・読者の新たな関係を考える―編集者の立場から―」(歴史学研究会編『歴史を社会に活かす』東京大学出版会、2017年)と重複していることをお許しいただきたい。

## 註

- (1) 私は日本史専門出版社である吉川弘文館の編集部に16年間勤務したあと、独立して「有限会社 有志舎」を2005年に開業した。なお、有志舎は歴史学のなかでも近現代史を中心とした学術書を出版する出版社である。
- (2) 以下、私の手帳や企画書に記入してある日付による。
- (3) 結果的には、「東京論」なるものは原山浩介氏の「第四章「風評被害」の加害者たち」という形で、さらに内容豊かになって設けられることになった
- (4) 私が参加している(したがって有志舎自体としても協力・協賛している)、「本が育てる街・高円寺」(略称:「本街」)というボランティア団体がある。  
これは、東京都杉並区高円寺を拠点に、学校・地元商店街・住民と連携して高円寺を神保町と並ぶ「本の街」にしようというプロジェクトを推進している団体である

(代表は古書店「コクテイル書房」店主の狩野俊。他に役員が私を含めて八名いる)。この「本街」は単に経済的な「街おこし」のための活動ではなく、本を通して文化的な土壌を高円寺に創り出す(もしくは再生させる)試みなのであるが、「本街」の具体的な活動としては、以下のようなことが挙げられる。

- ・ 様々な本を採り上げ、読書会・勉強会を随時開催している。
- ・ 近隣の小学校等と協力して、大学研究者による子ども向け出張講義を行っている。
- ・ 学術出版社と連携し、商店街の中で学術書のトークイベントを行っている。
- ・ 毎回、作家などのゲストを迎えてテーマを決め、一般の方々に本を持ち寄ってもらい、語り合うイベントhon-com(ホンコン)を行っている。書き手と読者が直接語り合える場を提供しているわけである。
- ・ 高円寺におけるいくつかの商店に「まちなほんだな」という、本を自由に交換できる棚を設置し、住民相互が無料で本の交換を行えるようにしている。また、年に二回、大規模な「本とBookの交換市」(様々な本をBook券という交換券を介して自由に交換し合うイベント)をJR高円寺駅前広場で行っている。
- ・ 様々な人々から、本の寄贈を受けたり、買い取りを行っている。
- ・ 高齢者の方々(亡くなられた場合はご遺族)からの要請により、その方の蔵書をまとめて引き取る「ブックレスキュー」を行い、廃棄される本を少なくしようとしている。

このように、「本街」では本を媒介にして、新しい地域文化・読書文化を創り出そうとしている。特に重要なのは、多くのイベントが「教える・教えられる」ものではなく、共に語り合うものであったり、実際にフラットな位置で話すものであることだ。将来はこういう中から新しい書き手なども出てきて欲しい。

また、埼玉県北浦和の商店街では、中田英樹・猪瀬浩平（文化人類学）らによる「野良人類学会」という「ストリートから人類学をする」勉強会が行われ、買い物客や地域住民、学生などの多くが参加している。

この会の代表である中田によると、「いわゆる、「先生」と「優秀な学生」が主体となって、野へと降りたって（大学という城から、「民」の暮らす城下へと降りたって）、「民」の声を城へ持ち帰り議論するような姿勢＝「ストリートを人類学する」ような姿勢ではなく、街に生きる様々な人々が、時には場を独占する事もありつつ、自由に伸び伸びと喋ることができる場としてこの会はあるのです」という事であった。まさにオルタナティブな学問実践であろう。

さらに、山梨県甲府市の「本と珈琲 カピバラ」も注目される。ここは小さなカフェ兼書店だが、社会思想史研究者の早尾貴紀が運営に携わり、販売する本（新刊本・古書）のセレクトとブックトーク・読書会などの企画・運営を行っている。トークでは、『明治維新をとらえ直す』の奈良勝司、『プロパガンダの文学』の五味潤典嗣、『日本リベラル派の頽落』の徐京植、『日中戦争全史』の笠原十九司など、硬派な本の著者を招く一方で、読書会では、アーレント『イエルサレムのアイヒマン』やボーヴォ

ワール『第二の性』などの古典にじっくり取り組んでいる。ハードルはやや高いが、それでも常連の参加者が確実にあり、少しずつ発展してきている。

特に後の2例は研究者自らが大学の外で、自力で「知」の世界を拡大させようと奮闘しているもので、こういった「独立系〈知〉のコーディネーター」とも言える存在がすでに登場してきていることは大変心強い。

〈関係URL〉

本が育てる街・高円寺：

<http://hon-machi.info/>

野良人類学会：

<https://www.facebook.com/norajinrui/>

本と珈琲 カピバラ：

[https://twitter.com/book\\_capybara](https://twitter.com/book_capybara)